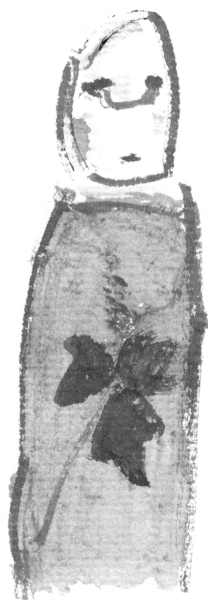


草筆木筆で描く不思議のらんたち

草画帖

51



十月

号



葛（クズ）号です。
秋の七草の一。
蔓の先っぽを筆にします。

珠洲・飯塚窯

葛の徑ぬけて窯場にいたりけり

闇もまた翅すりあはす虫時雨

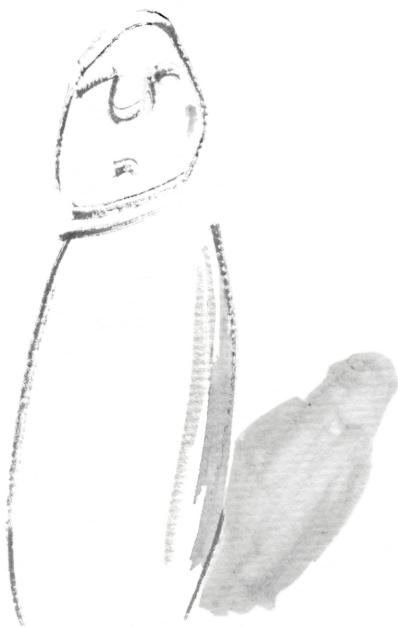
ボ
ー
ー
ー



ボーボーたるものは、目にも映り、耳にも響き、胸にも広がる。



あなたなる夜雨の葛のあなたかな 芝不器男



コオロギもスズムシも月の山から聴こえるよう…



こころの裏のしろじろと、風の月夜に照らされて。

くじら座

☆ 一九八六年

秋の
がらんと
だだっぴろい
くじら座
星の
乏しい
空の荒野を
双眼鏡でのぞいて
ぼくは慌てた
肉眼では見えない
暗い星が
原野に
点々と光っている

☆ 二〇二二年

くじら座に

寥々と

秋風が吹く

寂しくなつたら

ここへ来る

孤独はがらんど

だだひろいのがいい

どこかに

ふしぎな星も

息づいている

くじら座は

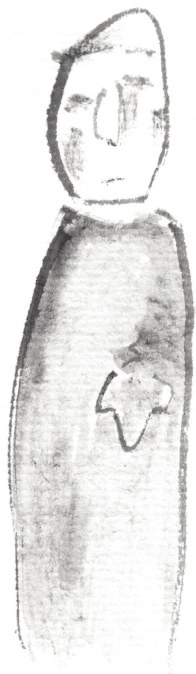
どこか懐かしい

異郷だ

怪物だ



山径をゆけば葛の花、河原をゆけば葛の花。



葛の葉のような手で大まかなことも細かなこともする。



どこかで水が流れる音、心臓の鼓つ音とする。



向い山で ピカピカ光る 月か星か螢か … あなたをまねく くずの葉

——宮城県栗原郡栗駒町 民謡



北陸線鈍行列車の車窓。倶利伽羅峠で加賀越中の晴雨分かれる。

草話

草画の筆が五百種を越えた。小さな庭や、散歩の道々の草木たち、時折いたたく花や野菜との機縁がこんな数字になった。

ふうらのルーツは北条五百羅漢だから、五百という数字には一応の愛着はある。

土筆から始まって、石、貝、羽根なども使って、それらを含むと五百番目は木槿、草木に限定すれば南天萩が記念の筆となった。

*

思えばよく描いてきたものである。草画一万四千枚余。それだけ草木との出会いが嬉しく、草木との遊びが楽しく、草木と共に生きてきた日々であつたのだろう。絵を描いた後もとっておくから、文房の机の上はいつも草や木で賑わい、野の匂いがした。

*

ぼくは若い頃に、夢で、俳句の先人から「草墨」という名を与えられた。当時は俳句を作っているわけでもなく、墨を触っているわけでもなく、当惑したけれども、とりあえず草の一字だけ貰って、雅号とした。艸々子。

それが今、草で墨絵を描いている。いろいろのことがあつて、気がつけば人生の終章に、なるほど草墨という姿・形になっている。不思議なことだと思う。



葛の葉

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第51号 2022年9月29日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008